みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

大村しげコレクションにみる“着物リフォーム”：12点のワンピースから

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 八千木 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001450

横川公子・笹原亮二編『モノに見る生活文化とその時代に関する研究』
国立民族学博物館調査報告　68:219-236(2007)

8.　大村しげコレクションにみる“着物リフォーム”

――12点のワンピースから――

林　八千木

1　はじめに

大村しげコレクションには，洋服類に分類される資料の中に，着物地で仕立てられたワンピース12点が丁寧に保管されていた。コレクションの中の写真を見ると，大村しげは，講演会，パーティ，雑誌の対談など，公式の場には和服を着用しており，また，ちょっとしたお出かけにも和服を着用している。だが，1980年代以降の写真には，旅行などで，12点の中のワンピースを着用しているものがある。それらのワンピースの中には痛み具合から着用頻度が高かったと推測されるものもあるので，老年期には着物地で仕立てられたワンピースを愛用していたことが窺われる。さらに，写真には，12点のワンピースと同じ布の着物を着用しているものもあるので，彼女が“手持ちの着物をワンピースに更正する”，即ち，最近流行している“着物リフォーム”を行っていたことが判明した。

近年，和服を着用する人が減少し，箪笥の中に眠っている和服を活用するために，着物を洋服や小物にリフォームすることが流行しており，アイディアや作り方を示した本が刊行され，婦人誌に特集が組まれ，着物リフォームの教室も開かれている。高価な値札の付いたものがデパートの即売会で売られたり，街中でリフォームした洋服を着用している人を見かけたりもする。ホームページで洋服へのリフォーム注文を受けつける呉服屋さんも多く出現している。

本稿では，大村しげが残した和服地から仕立てられた12点のワンピースの，素材，デザイン，縫製，製作者，製作年代などを調査し，製図に起こすことで，彼女が行った“着物リフォーム”を明らかにし，現在流行している着物リフォームとの関連や，彼女の洋服や布地に対する考え方を探ってみたい。

2　素材

素材については，表1に示したとおりである。

表地の材質は毛と絹と綿であるが，綿は裏なしで袖丈が短めの夏用として製作されている。

表地布幅は狭いもので34.5 cm，広いものは38.5 cmとなっており，違いが4 cmもあるが，反物には本来，幅の違いがあり，さらに洗濯などによって縮んだものもある

表1　12点のワンピースに使用された布地一覧（単位 cm）

	収集番号	表地布幅	表地の素材	表地の柄	裏地
1	B565	35	毛	黒地絣	裏なし
2	B813	34.5	毛	紺地に追いかけ風縦縞	身頃，袖ともに絹の男性用長着の裏地
3	B926	36.5	綿	紺水色縦縞	裏なし
4	B1432	38.5	絹	焦げ茶色に亀甲花	袖は化繊の八掛地，身頃は絹の男性用長襦袢地？
5	B1433	33.5	毛	赤茶色絣	袖は絹の八掛地，身頃は絹の胴裏地
6	B1434	35.5	絹	紺赤青黄色などの縦縞	袖は化繊の八掛地，身頃は化繊の胴裏と袖と同じ八掛地
7	B1435	37	絹	茶紺灰色縦縞	袖は絹式服用白長襦袢地，身頃は男性用絹長襦袢地？
8	B1436	36	毛	黒地に黄色横縞	袖は男性用絹胴裏地，身頃は男性用絹長襦袢地
9	B1437	37	毛	紺地絣	裏なし
10	B1438	37	毛	白地に蚊絣と1437の残り	袖は裏無し，身頃は絹の胴裏地
11	B921	36.5	綿	花入り菱	裏なし
12	B925	35.5	綿	紺無地	裏なし

と考えられる。

裏地は，女物の八掛地，胴裏地，長襦袢地，男物の長襦袢地など，さまざまな和服裏地が使用されている。

コレクションの中には大村しげの祖母・母が整理したと思われる洗い張りを終えた古い和服地が数多く残されており，裏付きのワンピースには保管されてあった古い布を裏地として再利用したものもあると考えられる。

12点のワンピースは表地も裏地も全て，ワンピース用の洋服地を購入することなく，和服の布地が再利用されている。

生地の色・柄は紺や茶系の地味な地色に縞や小花や絣の文様などの布が利用され，洋服に仕立てても，明らかに和服からリフォームしたとは思われないものを選んでいる。

3　デザイン

デザインについては，表2に示したとおりである。

3.1　身頃

身頃のデザインは12点とも脇線が直線で，ウェストに切り替えがない。9点に肩

表２　各部の寸法とデザイン（単位 cm）

	収集番号	衿	背肩幅	袖丈	袖幅	袖山	袖山いせ	肩ダーツ	ポケット
1	B565	衿なし	26	28.5	60	3.5	無し	有り	無し
2	B813	へちま風スタンド	27	40	63	3.5	無し	有り	無し
3	B926	衿なし	27	32	66	1	無し	無し	脇
4	B1432	スタンド	26	41	72	3.5	無し	有り	脇
5	B1433	スタンド	26	41	66	3	無し	有り	脇
6	B1434	着物風	25	41.5	62	3	無し	有り	脇
7	B1435	スタンド	23	41.5	62	3.5	無し	有り	脇
8	B1436	スタンド	26	43	72	3.5	無し	有り	脇
9	B1437	スタンド	26	43	60	3.5	無し	有り	脇
10	B1438	衿なし	27	43	64	3	無し	有り	脇
11	B921	衿なし	21	32	38	14	有り	無し	無し
12	B925	衿なし	20	37	39	13	有り	無し	貼り付け

ダーツはあるが胸ダーツは１点にあるだけで（B921 のみある）平面的である。大村はかつて「胴が長くずん胴で，太短い手足の日本人には，きものはありがたい衣類です。かっこうの悪さを包み隠してくれます。一枚の長いきれを直線に裁って直線に縫うのです」[1] と書いている。12 点のワンピースが直線的で平面的なデザインなのは，上述のように自分の日本人型の体型を包み隠してくれる着物に似たデザインを好んだ結果であろう。

さらに前開きワンピースであるという点も 12 点全てに共通する。コレクションの中の草履，帯揚げ，帯〆，また著書などから，彼女が和服のおしゃれには強い関心を払っていたことが分かる[2] が，しかし一方で，「なんせ，からだがきものの格好になっているので，いまさら頭からかぶるようなもんは，どもならん。別にスタイルなどはどうでもようて，どうせ悪いのやから，涼しかったらそれでよろしいという主義である」[3] と述べているように，洋服においては実用性を重んじていたと思われる。このことから 12 点のワンピースが全て着脱し易い前開きワンピースであるのも納得できる。B926 と B1433 は前中心下部が閉じているが，上部の開閉部分が広いので，頭からかぶらずに着用できるようになっている。

後身頃の中心に継ぎ目があり，２枚のパーツから構成されているのは和服の布幅から致し方のない結果である。

背肩幅は，B921 と B925 を除き，23〜27 cm と広く，肩先が身体の肩先よりかなり下がっており，和服のデザインに近いものといえる。これは袖の形と連動したもので，ゆったりと着用できるという利点がある。

B565 と B921 は前打ち合わせがダブルになっているが，これはデザインに変化をも

たせる工夫であろう。

ポケットは有るものと無いものとがある。デザインが特によく似ているB1432〜1438の7点は，肩ダーツがある。ポケットが脇ポケットであるという点も共通している。

3.2　衿

衿なしが4点で，他は全てスタンドカラーである。B1434は和服の衿のように縦布をそのまま使用したものであるが，着用時はスタンドカラーに似たものとなる。

3.3　袖

袖の形は大きく2つに分けられる。1〜10の10点の袖は図1のような形で，背肩幅は23〜27 cmと広く，袖ぐりのカーブが小さい。袖幅は60〜72 cmと広く，袖山は1〜3.5 cmと低い。また袖付けにいせがなく，袖付け縫い代は割られている。これらの点から和服の袖付けに近い形態といえる。模様合わせの関係で横布を用いている1点（B1436），袖幅の狭い1点（B925）を除き，袖中心縦方向に継ぎ目があり，後身頃と同じように2枚のパーツから構成されているのは和服地の布幅を利用した結果である。袖下の両端が上がっている点は，現代の洋裁技法には見られないが，「婦人之友」[4] には図3のような製図がある。これは腋下でゆとりを持たせる工夫であり，“襠”に当たる役割を果たしていると考えられる。

11〜12の2点は図2のような袖の形で，袖山は13〜14 cmと高め，袖幅は38〜39 cmと狭い。袖山にはいせがあり，縫い代が袖側に倒されており，パイピングで始末されているという点は現代の洋裁技法と同じである。

B926・B1436の袖は横布を用いており，腕を横にあげた時に袖の縞と身頃の縞が同じ方向になるように配置している。これは和服的な布の裁ち方といえる。B926においては，着用時（腕を下ろした時）に，袖の縞が縦方向（身頃と同じ方向）で，袖口の縞が衿ぐりや前立てと同じ方向になるようにするには，袖に縦布を用い，袖口に横布を用いればよい。そのような洋服的裁断方法で製作しても袖幅が狭いので布幅は足りるはずなのだが，そうしなかったのは，製作者がデザイン的に変化をつけようと意図的に行った工夫の跡とも推測される。B1436も同じように袖に横布を用いており，腕を横に広げた時に身頃と袖の縞が1本の繋がった線になるように配置してある。洋服的な感覚からみれば，着用した時に縞が同じ方向になるように配置するのが一般的であるが，同じ縞模様のB1434やB1435では袖に縦布を用いているので，やはり，デザイン的工夫の結果であろう。

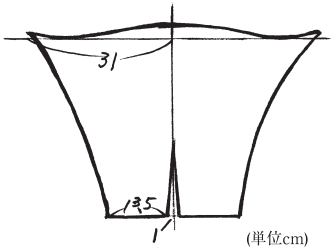


図 1　B1434 の袖型紙

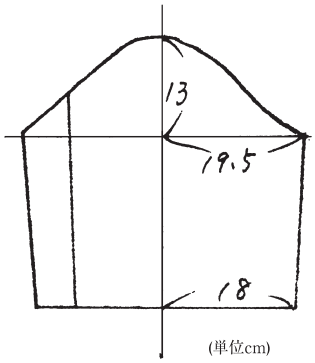


図 2　B925 の袖型紙

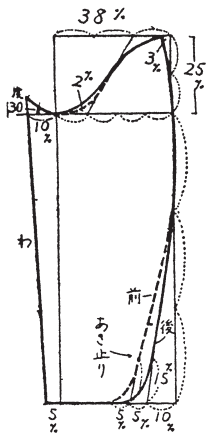


図 3　袖型紙

（「婦人之友」1953 年 12 月号より転載）

3.4　特徴

12 点のワンピースの特徴は表 3 のとおりである。

3.5　製図

12 点のワンピースの製図については最後に示す。

4　縫製

全てミシン仕立てである。表地の背中心の継ぎ目，袖中心の継ぎ目とも耳が利用されている。背中心，袖中心，肩，脇の縫い代は全て割ってあり，裾の始末は端ミシンをかけてまつってあるなど，洋裁技法が 12 点に共通して取り入れられている。裏地の背縫い代は右身頃が上になるように片返しになっている。これも洋裁技法である。

11 点にボタンホールがあり，玉縁と手かがりのものが 1 点ずつで，他は全てミシンによるものである。1 点はスナップ留めである（表 4）。

表３　12 点のワンピースの特徴

	収集番号	特徴
1	B565	左の前身頃が上になっている。左前身頃には衽部分を利用したと思われる重ね部分がある。重ね部分は上部しか固定されておらず，着用して歩く時には衽のように翻るようになっている。袖口と前端にパイピングを施している。
2	B813	スタンドカラーの衿の先端を尖らせている。色の濃淡をうまく利用している。
3	B926	袖は横布を用いているので，腕を横に広げた時に縞が身頃と同じ方向になるが，着用した時には直角になる。縞模様を効果的にするために衿ぐり，前立ては横布，袖口は縦布にしている。縞模様を前中心下部を閉じている。
4	B1432	前袖下に継ぎ目がある。
5	B1433	前中心下部を閉じている。後身頃上部に切り替えがある。
6	B1434	衿は縦布を用いており，衿先を折り曲げている。
7	B1435	身頃，袖の型は B926 と同じであるが，袖布は B926 と異なり縦布を用いている。衿の表布は横布を用いているので，後衿は身頃の縞に直角の縞模様になる。
8	B1436	袖に横布を用い，腕を横に広げた時に縞が身頃と同じ方向になるのは B926 と同じである。横布を用いているので，袖幅は足りるが袖丈が足りないので，袖口に縞を合わせた別布を継いでいる。
9	B1437	衿に横布を用いている。
10	B1438	B1437 の残り布を身頃下部と左袖口に使い，無地と組み合わせることで斬新なデザインになっている。
11	B921	右前身頃は中心より 7.5 cm 出ており，左前身頃は中心までである。そのため，右前身頃が布幅不足となるので，脇に三角の布を継いでいる。衿ぐりと前端のパイピングが効いている。
12	B925	ヨーク，ポケット，袖口，ベルトに藍染めに合う布でパイピングを施している。ベルトはパイピングと同じ布の紐で結ぶようになっており，紐をハトメの穴に付けるという点など，他のものより凝ったものになっている。袖幅は狭いが縦布を使用しているので，並幅では足りず後袖で継いでいる。

表４　ボタンホールと縫い代の始末の方法

	収集番号	ボタンホール	縫い代の始末
1	B565	スナップ	端ミシン　ロック　パイピング
2	B813	ミシン	端ミシン
3	B926	ミシン	端ミシン　ロック
4	B1432	ミシン	端ミシン　裁ち切り
5	B1433	ミシン	端ミシン　裁ち切り
6	B1434	ミシン	端ミシン　裁ち切り
7	B1435	ミシン	端ミシン　裁ち切り
8	B1436	ミシン	端ミシン　裁ち切り
9	B1437	ミシン	端ミシン　ロック
10	B1438	ミシン	端ミシン　裁ち切り
11	B921	手玉縁	端ミシン　パイピング
12	B925	手かがり	端ミシン　パイピング

裏のあるものの縫い代の始末は，脇や肩は裁ち切り，裾は端ミシンをかけてまつってある。裏なしのものは端ミシン，ロックミシン，パイピングなどで始末がされている。

5　製作者

大村しげの著書の中には自分で洋服を縫ったというような内容は記されていないので，大村しげ自身の製作ではないと考えられる。12 点全てに製作店を示すネームリボンは無いので，高級ブティックによる製作ではないといえよう。前述の「婦人之友」に同じような袖の製図が出ていることから，それが出版された 1953 年頃に洋裁技術を学んだ人による製作であると考えられる。

また，和服的要素が混じっているのが以下のことから窺われる。B565 は和服のように左前身頃が上（右衽）になっており，打ち合わせはダブルで，上前には衽部分が利用されたように思われる。打ち合わせは上部のみ固定されているので，着用して歩く時には和服の衽そっくりに翻るようにデザインされている。B1434 の衿は和服の衿と同様に，同じ幅の縦布をそのまま使用している。さらに，背肩幅が広く，袖山が低く，袖幅が広いものが多いなどの点にも和服的要素が窺われ，これらの点から，製作者は和服製作技術も合わせ持っている人だと推測される。

6　製作年代

残された写真から次のことが推測される。

① B1432 は，同じ生地の和服を着用している写真（写真 1）が，1982 年に撮影した写真に同封されていたので，1982 年以降に製作されたものであると推測される。
② 1987 年 4 月 15 日に撮影された写真（写真 2）では，B1437・1438 と同じ生地の和服を着用しているので，それらは 1987 年以降に製作されたものである。
③ 1989 年に撮影された写真（写真 3）で B921 のワンピースを着用しているので，B921 は 1989 年以前に製作されたものである。

また，11～12 は袖の形や技法から 1～10 より後に製作されたものと推測される。

大村しげのコレクションの中に残された洋服関連の衣服は，若い頃に着用したと思われるものが数点あるが，それ以外は，上述ものと，晩年，体が不自由になってからのもの，夏用のアッパッパなどである。大村は 1987 年発行の『京暮し』で「わたしは年中大方きもので暮らしている。大方というのは真夏の七, 八月だけは，常にアッ

写真１　B1432 と同じ柄の和服を着用している。

写真２　B1437, 1438 と同じ布地の和服を着用している。

写真３　B921 のワンピースを着用している。

パッパを着ているからで」[5] と言っている。1987 年は彼女が 69 歳ということになるので，彼女は 60 歳代には真夏に 12 点のワンピースに似た単のワンピースを着用していたことが分かる。その頃から洋服の着用が少しずつ増え，ちょっとした外出用に和服地のワンピースを作り始めたのであろう。

以上のことから，これらのワンピースは 1980 年代以降，即ち，大村しげが 60 歳代以降，70 歳前後に製作されものであると推測される。

7　最近の着物リフォームの流行と大村しげの着物リフォーム

最近の着物リフォームブームは，婦人ファッション雑誌レディブティック社の編集者によれば，10 年くらい前からだという。レディブティック社は 1995 年 10 月に『和服のリフォーム――着物・帯をリフォームで蘇らせる』という雑誌を刊行しているが，眠っている和服の活用方法を，という要望に答えたものだそうだ。その前年の 1994 年 4 月には『別冊 NHK おしゃれ工房　着物のリフォーム』が出版されている。この中に，17～18 年前（1977～1978）から，着物地から袋物などを作る趣味の会を開いている人の例[6] と，20 年ほど前（1974 年頃），外国人にセールで買った江戸小紋の着物をドレスにしてくれと頼まれてから，自分の着物もリフォームするようになったという人の例[7] が紹介されていることから，1970 年代から着物を洋服や小物にリフォームするという行動を起こしていた人たちがいたことが分かる。

1990 年代以前には，大村しげが製作したのと同じ頃に当たる 1986 年 9 月に『森南海子の手縫い見習い――きものを洋服にリフォームする』（森 1986），1987 年 4 月に『きもの地で作る日本の布の洋服』（宮崎 1987）が刊行されている。2 冊には直線的な和服をできるだけそのまま利用した作品が多く掲載されており，12 点のワンピースがこれらの本を参考にして製作された様子は，デザイン的にも見受けられない。

大村しげが着物リフォームを行った 1980 年代は，写真 4 にみられるように，晴れの日に着物を着用する人が少なからずおり，着物は着物として箪笥の中に大切に保管しておくものだという考えがまだ一般的であった。が，その一方では，普段着として着用することが少なくなったので，箪笥の中の和服をどうにかして活用したいと考える人たちが増えていたのである。

大村しげが和服地からワンピースを作ったと推測される 1980 年代は，和服を洋服にリフォームする流れが少しずつ始まっていた時代であるといえる。

1990 年代以降に出版された本に掲載されている作品は，大島やウールや銘仙の着物などを普段着に，長襦袢をブラウスなどに，留袖をパーティドレスに，帯地をベストや袋物や屏風になどと多種多様である。2005 年 5 月，大阪阪急百貨店で開かれたリフォーム作品の即売会では，羽織りの紐を背部に飾りとして取り付けたりする奇抜

写真４　1986 年４月，中学に入学した子供を持つ父兄たち。10 人のうち４人が和服を着用している。

なものもあった。そしてそれらは，善し悪しは別として，着物地からリフォームをしたことが一見して分かるものが多い。だが，12 点のワンピースの大きな特徴（長所ともいえる）は，単純で平面的なデザインであるにもかかわらず，また和服的要素が含まれているにもかかわらず，洋服としてほとんど違和感のない雰囲気を持っていることである。ここに大村しげの和服に対すると同様なこだわりが洋服に対しても現れているのではないだろうか。

最近の着物リフォームの流行は，前述の『別冊 NHK おしゃれ工房　着物のリフォーム』の端書きに「娘のころの着物，親から譲り受けた着物，形見の着物（中略）たんすの中に眠っていませんか？　着物が普段着だった頃，私たちは何度も仕立て直し１枚の着物を大事に着ました。晴れ着として作られた着物も，姿をかえ布団地になるまで，何回も役目を果たしたのです。そんな着物をしまっていてはかわいそう。実際の生活にいかしたいものです。」と述べられているように，眠っているモノに新しい命を吹き込み，命を蘇らせ，モノの命を大切にしたいという思いのあらわれである。

大村しげも，「常着は縫い直すときに，初めは前身頃と後身頃を替え，だんだんすそが薄うなるので，腰のところで切り替える。そこまではまだ常着だけど，最後は肩で切って上すそをひっくり返し，丈もつい丈にすると，それはもう仕事着である」[8] と記しており，また，「わたしは自分の羽織の中で，ちょっと派手に思えるものを，上っ張りにしようかと思案中である。それは，初め無地の着物やった。そのうち色が焼けてきたので，染め直した。そしてまた染め替えて，今度は羽織にした。ほんまに三べんも染め直すやなんて，やっぱり京おんなのはしくれやと思う。（中略）しまつというのは，物の生命を大事にすること。決してケチではございません，とわたしは胸を張る。もったいない，もったいないとおばあさんがいうて，それを母も受け継いで，わたしもまねる」[9] と述べている彼女の思いも，現在流行している着物リフォー

ムと全く同じ思いであったことが分かる。それ故，彼女が洋服を作ることを考えた時，洋服用の布地を新しく求めずに，たくさんある着物，あるいは着物地の中から洋服に向く色や柄や生地を選んで利用しようと考えたのは当然のことだったのである。

8　おわりに

大村しげコレクションに残されている和服地から作られたワンピース 12 点の布地は表裏とも全て和服の生地である。デザインは，衿の有無，袖幅，袖丈の長短などで変化がつけられているが，12 点ともに非常によく似ており，直線的，平面的である。縫製は全てミシン仕立てで，背縫い代が割られているという点などから洋裁技法が取り入れられていることが分かった。製作は高級ブティックによるものではないと思われる。製作年代は 1980 年代以降で，大村しげが 60 歳代以降，70 歳前後だと推測される。

1980 年代は，まだ子どもの入学式などで和服を着用する人が少なからずおり，箪笥の中の和服を洋服にリフォームするという意識は一般的には低かったが，普段着として着ることのない和服をリフォームするという流れは既に起こっていた。1990 年代になって着物リフォームが本格的に流行し始めたが，一見して着物地から洋服にリフォームしたと分かるものが多い。だが，大村しげの 12 点のワンピースは，和服的要素を含んでいるにもかかわらず，洋服として違和感のない雰囲気を持っている。

著書にあるように，1 年の大方を着物で過ごしていた大村しげは，洋服には簡便性，実用性を求めていたように思われる。12 点のワンピースがデザイン的にあまり変化がなく，単純で平面的であることから，彼女は一見，洋服に関心が薄かったように見受けられるが，実際は，自分の体型の欠点をカバーするデザインを熟知していたのである。また，洋服として違和感のない色や柄やデザインを選んでいることは，着物に対すると同様，洋服に対しても彼女なりのこだわりを持っていたことを窺わせる。

最近流行のリフォームブームも大村しげの着物リフォームも，「モノの命を大切にしたい」という思いの現れであった。彼女の感性に根ざして製作された 12 点のワンピースは，祖母や母から受け継いだ“モノの命を大切にする”という彼女の信条を実践した具体例であるともいえる。

大村しげが和服地からワンピースを作ったのは，最近の“着物リフォーム”ブームの最先端をいく時代ではなかったが，先駆者であったことは間違いない。彼女の著書に具体的な着物リフォームの記述はないが，食生活において“おばんざい”を流行させた彼女が，衣生活においても流行を先取りしていたのは紛れもない事実である。

付　記

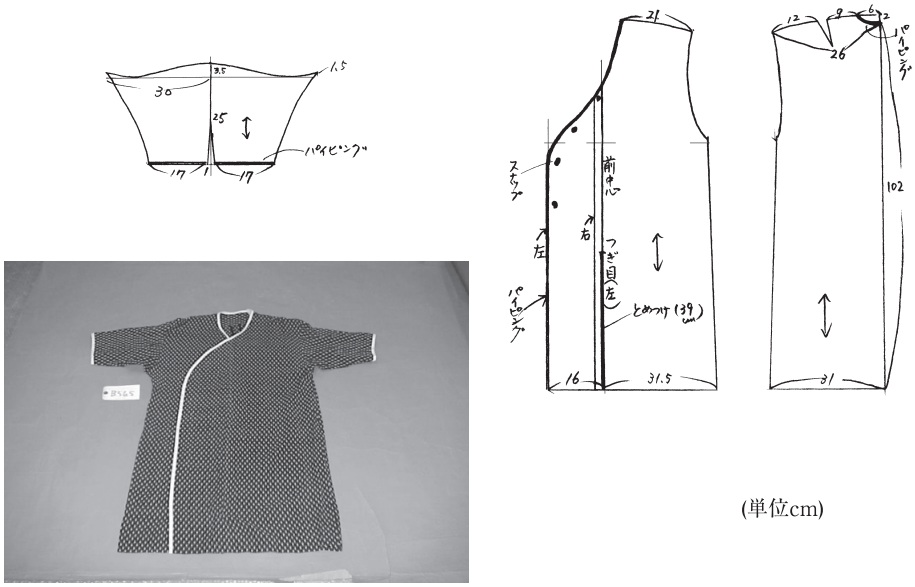
本稿執筆後，大村しげの和服を洋服や二部式着物に更生したという人についての若干の情報を得たので，この点についてはさらに検討していきたい。

注

1) 大村しげ『京の着だおれ』(1974　東洋文化社)，「はしがき」。
2) 大村しげ『京暮し』(1987　暮しの手帖社)，p138 に「きもののものなら少々高う出しても苦にならんのに，服のもんはそうはいかん」とある。
3) 同上，p136。
4) 1953 年 12 月号。
5) 注 3 に同じ。
6) 宇和島市の和裁教師，山口美和さん。
7) 東京都杉並区の富永芳枝さん。
8) 注 3 に同じ，p30。
9) 大村しげ『しまつとぜいたくの間』(1993　佼成出版社)，p187。

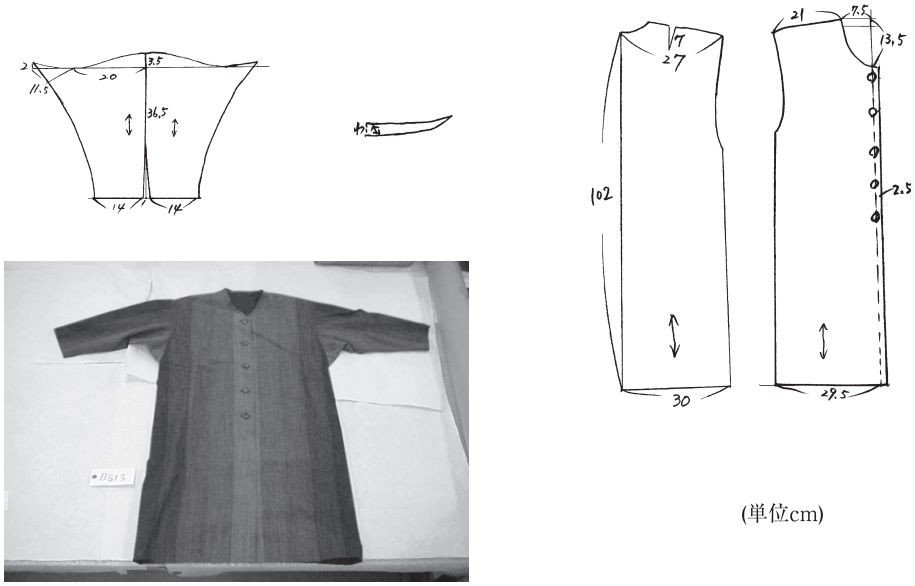
文　献

大村しげ
　1974　『京の着だおれ』京都：東洋文化社。
　1987　『京暮し』東京：暮しの手帖社。
　1993　『しまつとぜいたくの間』東京：佼成出版社。
片野孝志
　1984　『日本文様辞典』東京：河出書房新社。
尚学図書・言語研究所編
　1988　『文様の手帖』東京：小学館。
丹美与
　2001　『古い着物のリメイク』東京：日本ヴォーグ社。
日本ヴォーグ社
　2004　『着物リメイク 2』東京：日本ヴォーグ社。
日本放送出版協会
　1994　『別冊ＮＨＫおしゃれ工房　着物のリフォーム』東京：日本放送出版協会。
婦人之友社
　1953　『婦人之友』13 (12) 東京：婦人之友社。
ブティック社
　1998　『和服をすてきにリフォーム』東京：ブティック社。
宮崎東海
　1987　『きもの地でつくる日本の布の洋服』東京：日本放送出版協会。
森南海子
　1986　『森南海子の手縫い見習い――きものを洋服にリフォームする』東京：海竜社。



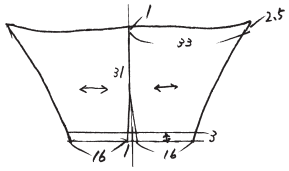
(単位cm)

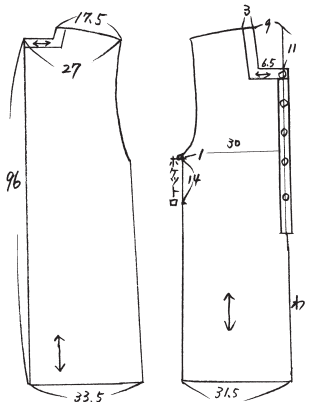
図4　資料（収集番号 B565）



(単位cm)

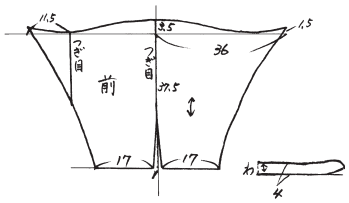
図5　資料（収集番号 B813）

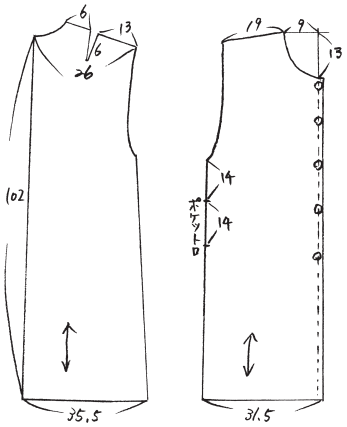




(単位cm)

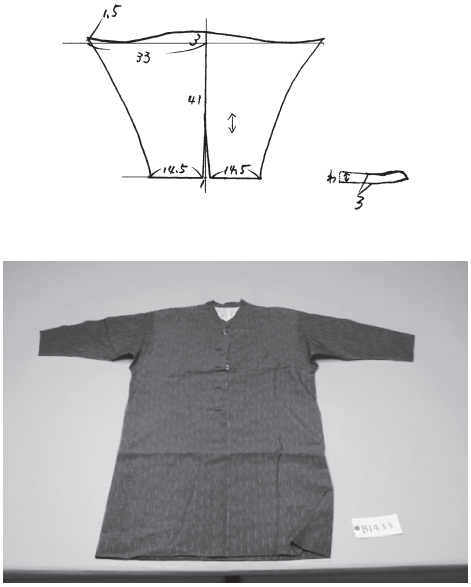
図6　資料（収集番号 B926）

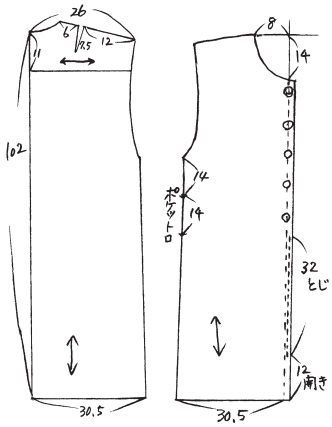




(単位cm)

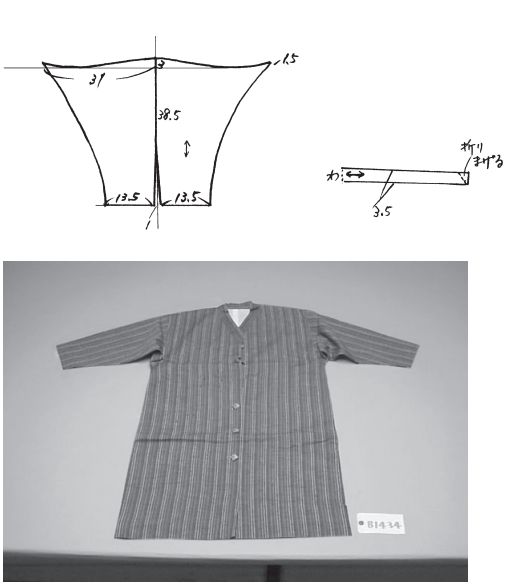
図7　資料（収集番号 B1432）

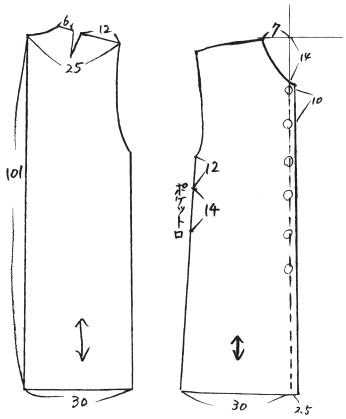




(単位cm)

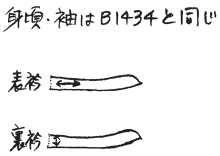
図 8　資料（収集番号 B1433）





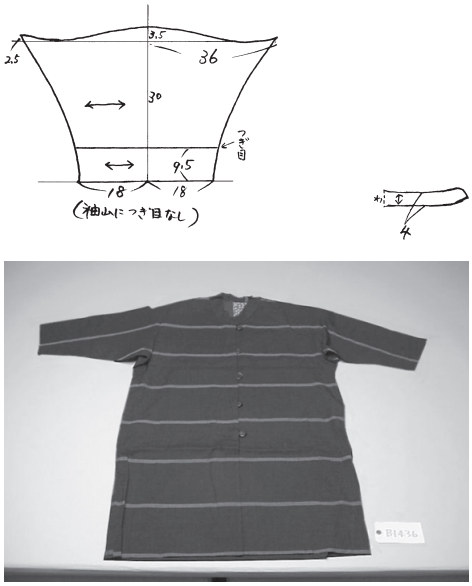
(単位cm)

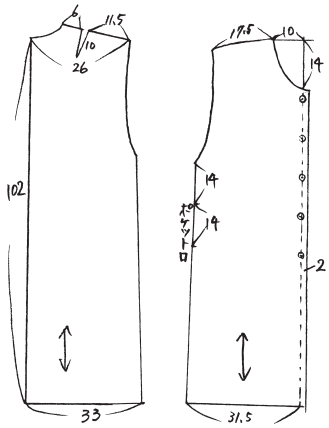
図 9　資料（収集番号 B1434）



(単位cm)

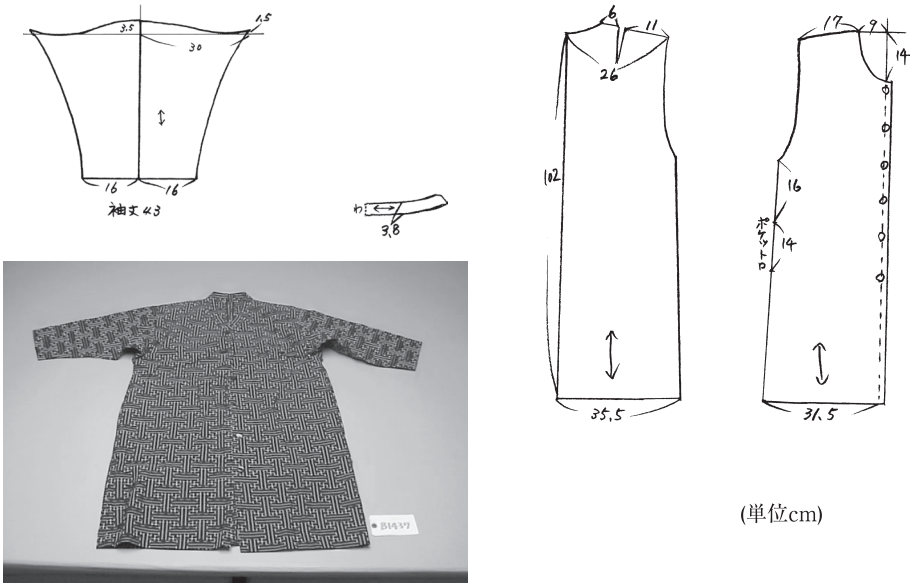
図 10　資料（収集番号 B1435）





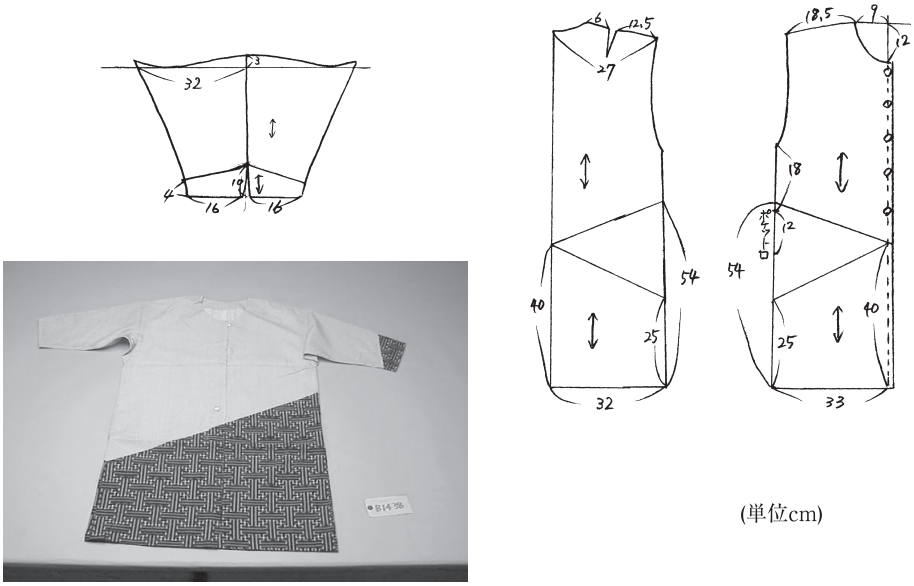
(単位cm)

図 11　資料（収集番号 B1436）



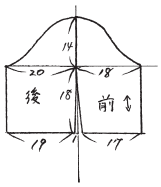
(単位cm)

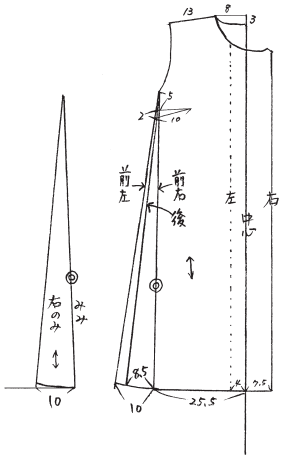
図 12　資料（収集番号 B1437）



(単位cm)

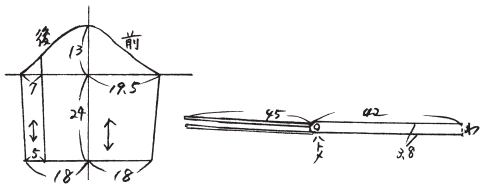
図 13　資料（収集番号 B1438）

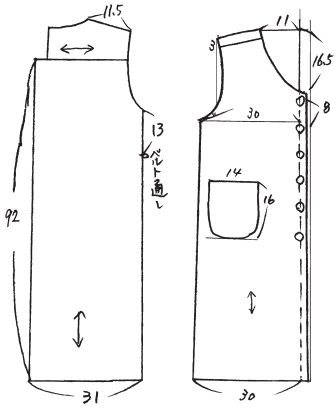




(単位cm)

図 14　資料（収集番号 921）





(単位cm)

図 15　資料（収集番号 B925）（単位 cm）